

日本中世において、禅は主に武士の信仰として発展した。鎌倉幕府・室町幕府の執政者は禅に深く帰依し、鎌倉幕府執権、後醍醐天皇、室町幕府初期政権の帰依を受け、特に室町時代においては、禅宗は国家宗教として国家を支えた。禅宗各派のなかでも、足利将軍に絵の絶対的帰依を受け、室町幕府の官寺的役割を果たしたのは、夢窓疎石を派祖とする臨済宗夢窓派であった。

夢窓疎石（1275～1351）は、「国師」として日本仏教界に君臨し、天龍寺創建・安国寺利生塔利生塔を推進した。夢窓派の禅僧は室町幕府の政治や外交に参画するとともに、足利将軍邸である北山殿（金閣）・東山殿（銀閣）を中核的拠点として華開いた、北山文化・東山文化に代表される室町文化の中核的担い手となった。

英語版のウィキペディアには、夢窓は次のように記されている。

Musō Soseki (夢窓 疎石, 1275 - October 20, 1351) was a Rinzai Zen Buddhist monk and teacher, and a calligraphist, poet and garden designer. The most famous monk of his time, he is also known as Musō Kokushi (夢窓国師) ("national Zen teacher"), a honorific conferred to him by Emperor Go-Daigo.

夢窓は禅僧であると同時に、書家・詩人・作庭家でもあると記されている。

かつて柳田聖山氏が「わが中世の禅と文学は、すべてこの人（夢窓）を開山祖師と仰ぎ、石庭や水墨、建築、美術工芸など、この人を開山祖師とする、一種の超カリスマ。中世文化のデザイナーとして、禅を芸術化した張本人、三国仏教史の偉観である」（「解説」『叢書 禅と日本文化 四 禅と文学』ペリかん社、1997）と述べたように、夢窓は思想のみならず、文芸・美術・芸能・建築・庭園などにも重要な変革を及ぼしたのである。

夢窓の最大の宗教的事蹟は天龍寺の創建である。北朝の光厳上皇をかついだ足利尊氏・直義は、後醍醐天皇の菩提を弔い、禅を室町幕府の国家宗教として位置付けるために天龍寺を創建することにしたが、資金がまったく足りず、工事は困難をきわめた。それを打開するために、夢窓が提案したとされるものが、いわゆる天龍寺船である。康永元年（1342年）に元へ渡航した天龍寺船は莫大な利益をあげ、その利益によって天龍寺は完成にこぎつけることができた。

天龍寺船に先立って、元に派遣された寺社造営料唐船のひとつが、1976年に韓国全羅南道新安那智島邑道沖の海底から発見されて、引き揚げられた沈没船（いわゆる新安沈船）である。この船は、元応元年（1319年）に焼失した東福寺の再建のための造営料を名目として、元亨3年（1323年）に派遣された唐船のうちの一隻と推測されている。この新安沈船から引き揚げられた大量の遺物によって、寺社造営船によって日本にもたらされた莫大なモノ（唐物）が明らかとなり、それが禅宗文化の日本における展開において大きな役割を果たしたと考えられる。

夢窓の多文化性は夢窓ひとりにとどまらず、日本禅の特徴であり、今回はその諸相について報告する。

キーワード：庭園、文学、儀礼、唐物